

オーストラリア タスマニア島 旅行記

小 泉 力

タスマニアはオーストラリア東南部メルボルン南方の島で、その東はニュージーランド、南は南極である。北海道よりやや小さい島で、タスマニア州として独立し、ホバートが州都である。オーストラリアでも特に自然が豊かで、有袋類のカモノハシ、タスマニアデビル、ユーカリ類など固有の動植物が生息し、美しい自然が保存されていることで知られている。今回はタスマニアの植物とその自然環境を探索する旅である。

●第1日目 2008年10月14日(火)

成田空港を20:30出発、今回は鈴木司団長以下参加者15名と添乗員はおなじみの高橋美千子さん、旅行会社は近畿日本ツーリスト東京イベント・コンベンション支店である。

●第2日目 10月15日(水)

朝、中継地シドニーに到着し、午前中シドニー湾に望む公園を散策し、ユーカリやゴムノキ(*Ficus macrophylla*)の大木、日本では見ない宿根草や花にカメラを向ける。樹上にワライカワセミを発見、ここでもシャッターを。有名なオペラハウスの建物を見学し、昼食。このとき近くの公園で待望のジャカラングの花を見た。植込みにはオーストラリアらしくカンガルーポーが良く育っていた。

午後、空路でタスマニア島南端の都市ホバートへ向かう。空からタスマニアの森林の山火事の煙が見える。森



シドニー オペラハウスをバックに記念写真

林火災はこの地方の植物の独特の生態をつくった要因であることを後の見学で実感した。空港に到着し、待機していると麻薬犬かと思われる犬が荷物や人を嗅ぎまわっている。ガイドさんの説明ではタスマニアではフルーツ犬なのだそうで、外来の植物に対する厳しい国の環境保護の姿勢が窺われる。

夕方、ホテル・リッジス・ホバートに到着。ここでも植え込みの花木や宿根草の花にシャッター。

●第3日目 10月16日(木)

いよいよタスマニア植物探索の始まりである。今日から4日間、このツアーの解説をしてくれるのはリチャード(Richard Hale)さんと現地ガイドのみどり(Midori O'Brin)さんである。リチャードさんは自然保護や自然観察の専門家で、日本視察団は今回が初めてのようで、非常に熱心に説明してくれた。先ず最初に話したことは、この土地がネイティブであるアボリニジの人達のものであったこと、そしてヨーロッパ人がこの人達を滅ぼしてしまったという自責の念を語っていたのが印象的であった。



マウントウエリントン展望台よりホバート市街を望む

マウント・ウェリントン

最初の見学地マウント・ウェリントンに向かう。頂上(1270m)の展望台は眼下に広い河(内湾)を挟んだホバートの市街地や周囲の山々を見下ろす絶景地である。途中の森林地帯はstringybarkというユーカリ(*Eucalyptus obliqua*)で、過去の山火事で巨木の木肌は黒焦げである。森林限界を過ぎ、頂上付近は岩石とハイマツのような低



ユーカリの巨木

木の平坦地となる。岩の間に生える高山植物は強光、乾燥、風雪に耐えて米粒のような硬い葉、小花の特徴をもっている。眺望を楽しみ、写真を撮る。

下山の途中でもタスマニアの植物を手にとつての解説があり、皆写真やメモを熱心に行っている。以後、車中も散策中も常にタスマニアの自然や植物解説が続けられた。

王立タスマニア植物園

河岸に沿った風光明媚な14haの植物園は中にチューリップの花壇、広々とした芝生、温室、各種樹木、花木見本園、南極植物展示用の冷房ハウス、ベジタブルガーデン、日本庭園など、非常に美しくよく整備されていた。特に温室はベージュ色の石作りに白い塗装の木造というクラシックで贅沢な建物である。シネリア、シクラメン、シンビジウムなどに春の草花と観葉植物をゆったりと配置して美観に優れ、センスのよさに感心させられた。日本庭園は藤とサトザクラの関山が満開であった。見学後園内のレストランで昼食。

英国風の個人庭園

ハミルトンの個人庭園ではオーナーがヘレンさん、管理をカーリーさんがやっている庭園を見学。観光客が訪れるガーデンではないが公開されている。約40分。ここは広い牧場の中にある一軒家で、自分で楽しむためにこの家と庭と、たくさんの植物コレクションがある。ここでの話題の植物は一見サトザクラの御衣黄に似た緑の花？これは何だともよく見ればエルムの翼果の塊であった。入り口の白いライラック、青いケアノサスと黄緑色のユーフォルビア・カラシアスが真っ盛りであった。

マンズフィールド・ナショナルパーク

ここは巨木の森の中を川に沿って遡ると4段の美しい大滝に到るコース。なんといってもその巨大なユーカリが天高く林立している風景には圧倒された。思わずその根元に抱きついて巨大さを実感してみる。種類はジャイアント・アッシュ(*Eucalyptus regnans*)で樹高90mに達するという。川に沿って木性シダ(*Dicksonia antarctica*)の樹林が茂り、滝の近くではそのしぶきで特に旺盛な生育をしている。林下は倒木が自然に朽ち果て苔生し、清流にはカモノハシが生息しているという。夕刻迫る頃、巨木の森を後にし、市内に戻りレストランで夕食後ホテルへ。



木性シダの林

●第4日目 10月17日(金)

今日はホバートを発ち、北上して途中見学しながらローゼンストーンに向かうコース。この辺りの風景はなだらかな山が続き、何か日本の里山を想わせる地形である。

ポノロングワイルドパーク

朝9時開門と同時にポノロングワイルドパークに到着。ここはタスマニア固有の有袋類や鳥類を主とした飼育・保護をしている。ほとんど見たこともない動物ばかりでウォンバット、タスマニアンデビル、ワラビー(小型のカンガルー)、エチドナ(ハリモグラ)、パディメロン、ボッサムのほか島内固有種ではないがコアアラ、カンガルーもいた。カンガルーの類は入り口で餌を貰って、手から食べさせる体験もした。

ここで認識を改めたのはタスマニアンデビルがとても可愛い動物であるということだった。夜行性で肉食有袋類としてデビルという名前をつけられ、歯をむき出した写真ばかりが喧伝されているが、実際は死んだ動物しか食べない生態系の中ではおとなしい掃除屋さんである。ここでの見学が、翌日のクレイドルマウンテンでの野生動物との



タスマニアアンデビル

身近なふれあいで
の予備知識になっ
た。

次にロスという
小さな町に着き、
宮崎駿「魔女の宅
急便」のモデルとな
ったといわれている
パン屋に立ち寄

り、キキの住んでいた屋根裏部屋を見学、特製のパンを
購入し食べる。

更に北上を続ける。途中の風景はうねうねと続く牧場
ばかりである。この辺りは、元はユーカリの森林地帯だ
った所だが、入植により開墾され、羊や肉牛(黒牛)の放
牧地となった。所々に広がるナノハナの黄色が美しい。

国立ローズガーデン

昼過ぎ、ウールマーズの国立ローズガーデンに着く。こ
このレストランで昼食をとり、バラ園の見学。広大なバラ
園だがちょっと時期が早くて未開花株で残念。しかし、
大して手入れもしていないのに生育はすこぶる良い。タ
スマニアに来て気がついたのだがどこでもバラの生育が
良いのは、多分乾燥した土地のせいではないだろうか。バ
ラ以外にもガーデンの樹木、草花は豊富で魅力的である。

今日の最終見学地、ローセンストン市街に程近いカタラ
クト渓谷見学。岩山を穿った渓谷は雄大で美しい。2人
乗りのリフトで渓谷を遡る。谷全体が公園になっていて
シャクナゲが大木となっているが、まだ咲き始めてあ
った。そこから徒歩で戻る道々、植物の説明があった。谷
の兩岸の岩の間から林立している樹木はモクマオウばかり
である。

市内レストランで夕食、グランドチャンセラ・ローンセ
ストンに宿泊。

●第5日目 10月18日(土)

今日はローンセンストンから西へ100km、山岳地帯のク
レイドルマウンテンに到るコースをたどる。この道も牧場が
続く。途中マクラーバ鍾乳洞を見学する。石灰岩の露頭
とカルスト台地が見え、近づいたことを知る。この洞窟は
1936年に二人の少年によって発見され、当分の間二人の
秘密にされていたという。それはここに棲息するツチボタ
ル(土蜚)の幻想的な美しさを見てしまったからである。

真っ暗な天井に星のような光に魅了される。

外に出てから、再び谷川に沿って下りながら植物探索。
ここは木性シダの林で特にシダ類が多い。

クレイドルマウンテン

12時頃クレイドルマウンテンのロッジに着き昼食。建物
は手作りで、板葺きの屋根がうれしい。昼食後ビジターセ
ンター周辺の植物観察、許可証のワッペンを胸に貼って
入山し、この森の主要な樹種ペンシルパインなどを観察。
通路はしっかりした木道が整備され自然に対する配慮と
来場者の安全性が行き届いている。1時間ほど観察し、
待望の世界遺産クレイドルマウンテンに向かう。

20分ほどで湖畔に近い駐車場に着く。眼前の湖を隔
てタスマニア随一の景観クレイドルマウンテンがその特異
な山容を現し、息を呑む風景だ。一同記念写真を撮り、
三々五々カメラを持って散る。湿地でコロコロと蛙の
声が静寂の中に聞こえてくる。風景を堪能して、名残惜しいが
近くの植物観察地へ移動。

ここは、この地を最初に紹介したWeindofer氏の山小
屋や記念碑がある丘の上である。この辺りにはアナナス
に似た葉の *Richea pandanifolia* (2~3m) が目立った。
ここでちょっとしたハプニング。熱心に植物の説明をして
いるリチャードさんは、1ヶ所に立ち止っていたのでヤマビル
に取りつかれた。ヒルは千葉県の鴨川の山中で困って
いるものとよく似ている。みんなもびっくり、飛び去るやら靴
下を払うやら。幸いどれも吸血されなかった。

夕刻、宿舎のボージャス・クレイドルマウンテン・ロッジに
到着。池を目の前にしたロッジは高級な山小屋というた
たずまいで、ベランダに出ると野性の有袋類が見られる自然
の中だ。なお、今夜のディナーは今回懇切丁寧な案内、
解説などのご配慮に対し感謝の気持ちをもってリチャード
さん、みどりさん、運転手のティムさんを招き、鈴木団長よ



クレイドルマウンテン



リケアを説明中のリチャードさん、みどりさん

り記念品の贈呈もあって親しい雰囲気でも盛り上がった。

夕食後、野生動物との出会いを期待してバスで再び暗闇の森の道を行く。赤色のライトを照らすと前述のウォンバットなどの幾種類かの有袋類が見えてきた。そのつど車を止めて観察、歓声が上がります。動物の行動は夜間に活発なようである。1時間余り見学してロッジに戻った。

●第6日目 10月19日(日)

クレイドルマウンテンからローンセストンに戻り、空路メルボルンへ。

早朝から出発までの数時間を自然観察にあてるべく各自散策コースを歩く。目的はまだ見ぬカモノハシを見たいからであったが、その好運を当てたのはMさん、Wさんの2人で、近くの川で泳いでいるところを見られたという。

10時にロッジを立ち、山岳地帯を下り、昨日のコースを戻る。出発して間もなくハリモグラを発見。車を止めてリチャードさんが捕まえて見せてくれた。丸くなって針を逆立てるので危険だが手慣れた手つきで抱え込んだ。みんな下車して観察、撮影。あとはそっと草原に戻ってやった。

途中チーズ工場の売店に寄る。余り店もない場所での産地直売である。ここではワサビチーズが日本に紹介されて人気とか。試食や地元の生産物などを物色。

午後クレイドルマウンテンに戻り、観光船に乗ってタマリバーをクルーズ。17日に行った溪谷を船で遡るコースだ。兩岸の丘に建つ住宅地は花と緑に囲まれて羨ましいような住環境である。

ローンセストン空港を17:30発ここでお世話になったリチャードさん、みどりさんに空港まで見送られ各自握手をして別れた。本当に良いガイドに恵まれた。メルボルンを18:35定刻通り到着。着後ホテルグランドハイアットメルボルンに宿泊。

●第7日目 10月20日

コモ(Como)ハウス

オーストラリア(ヴィクトリア州)のナショナルトラストのコモハウス、白亜の瀟洒な家だ。メルボルンで19世紀半ばに財を成した家族の家と室内の家具調度、美術品、生活用品の展示とガーデンが公開されている。ガーデンの樹木は歴史を経て大木となり、植物はボーダー花壇として植え込まれているが、かなり大型なものも多く、中でも目立ったものは世界最大と説明があった白い花のデージーで高さ2m位あった。そのほかシャクナゲ、エキューム、サトザクラの関山、アカンサス、原種タイプのクンシランのボーダーなどが開花していた。

国立シャクナゲ園

今回最後の視察地の国立シャクナゲ園である。メルボルン市郊外の高地にあり、こもユーカリの巨木に囲まれた森林の一角に開かれたガーデンである。正式には「ナショナルロードデンドロンガーデン」となっており、大人10ドル80セントである。広い園内はマイクロバスが運行し(無料)運転手兼ガイドの女性が説明してくれる。植物はシャクナゲ、クルメツツジ、エクスパリーなどツツジ科を主体として、丁度今が最盛期で色彩の豊かさを誇っていた。このほかコニファー、マグノリア、ヤマモガシ科のテロペア、バンクシア、レウカデンドロン、セルリア、プロテアなど春の花木が盛りであった。

さよならパーティー

今回の最後の夕食会は日本レストラン「乾山」である。純日本食で畳と障子の部屋に日本人の店員で、日本に帰ったようである。堪能して店を出る頃には満員の盛況で、お客はヨーロッパ系の人が多く、日本食という文化がこれほどに世界に広がっているのかと改めて感じた。

明日の出立に備えて荷物の整理に忙しい。

●第8日目 10月21日(火)

早朝にホテルを立ちメルボルン空港に着く。9:25発で中継地ケアンズに向かう。

ケアンズ発13:25にて成田に向かって出発、20:00に無事到着。

全期間良い天候に恵まれ、無事帰国できた。植物も堪能し、とてもよい旅行であった。

鈴木団長はじめ関係者に感謝申し上げます。